

氏 名：山 内 朋 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 5 9 号

学位授与年月日：平成 2 7 年 3 月 1 7 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：児童精神科病棟の自由時間のホールで展開される  
発達障害の学童への看護師のかかわり

Nursing Care for School Aged Children with Developmental  
Disabilities in the Hall of Children's Psychiatric Ward  
During Free Time

論文審査委員：主査 高 田 早 苗

副査 筒 井 真優美（正研究指導教員）

副査 小 宮 敬 子（副研究指導教員）

副査 守 田 美奈子

副査 佐々木 幾 美

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の背景】

発達障害に関する診療技術の向上や法的整備の進展の影響もあり、発達障害の学童の数は増加している。発達障害の学童は障害特性や独自の空間認知特性の影響から、自由に過ごすことや集団行動などが苦手である。特性による集団生活上の困難さに、虐待やいじめなどの傷つき体験が絡み合っただけで日常生活に支障をきたした発達障害の学童は、児童精神科病棟への入院を余儀なくされていた。入院している発達障害の学童が再び家庭や学校で生活するためには、他の子どもや看護師との交流を図る自由時間のホールが重要な意味を持つ時間であり、空間であると考えられる。

先行研究では、看護師が発達障害の学童の特性に応じたかかわりやその子どもなりの成長を意識したかかわりをしていることが明らかになっている。しかし、自由時間のホールに焦点を当てた研究は見当たらず、その時空間におけるかかわりも探求されてこなかった。このかかわりを明らかにすることで、発達障害の学童が自由時間に複数の人々がいる空間で過ごすために必要な支援や、看護師が行う具体的な看護実践を示すことができ、かかわりが発達障害の学童の治療や成長にどう寄与するかを探求できると考える。

### 【研究目的】

児童精神科病棟の日課がない自由時間に複数の人々がいるホールで展開される発達障害の学童への看護師のかかわりを明らかにする。

### 【研究方法】

エスノグラフィー（Emerson, Fretz, & Shaw, 1995/1998）の研究デザインに基づいたフィールドワ

ークを行い、参与観察を主としてインタビューを併用した。児童思春期精神科の入院治療を継続的に行っている一病院を研究施設とし、児童精神科閉鎖病棟でデータを収集した。研究参加者は、看護師 16 名のうち 13 名と、医療スタッフ 11 名のうち保育士 5 名・医師 1 名・臨床心理士 1 名・精神保健福祉士 1 名、入院中の発達障害の学童 19 名とその家族であった。発達障害の学童は広汎性発達障害または注意欠陥多動性障害の 7 歳~11 歳の子どもであった。予備調査を含めて 2 年間、計 81 回、データ収集を行った。データは Emerson, Fretz, & Shaw の方法を用いて分析し、経時的に見ていくことで意味が見出せるかかわりに、場面毎に意味が見出せるかかわりを織り交ぜながら、看護師のかかわりをプロセスとして構造化した。

### 【倫理的配慮】

日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会（承認番号：予備調査 2012-99、本調査 2013-71）及び研究施設の看護研究審査会・倫理委員会（受付番号：予備調査 H24-92、本調査 H25-57）の承認を得て行った。研究参加者には口頭及び文書にて研究の趣旨と方法、研究参加の自由意志、匿名性の保持、結果の公表などを説明して同意を得た。子どもの特性や発達段階に応じて子どもが理解できる言葉で説明し、子どもの生活や遊びに支障がないように注意を払って観察を行った。

### 【結果】

自由時間のホールにおいて看護師は、発達障害の学童が他の子どもや看護師との相互作用を通じて徐々に自分なりの方法で自由時間を過ごしたり、複数の人々がいるホールで過ごしたりできるようにかかわっていた。自由時間のホールにおける看護師のかかわりと発達障害の学童の変化を入院から退院までのプロセスで記述した。

#### 1. ホールに居続けられるようにかかわる

入院後 1 週間~1 ヶ月、発達障害の学童は怖がってホールに出てこないこともあれば、緊張した様子や興奮した様子でホールにいるなど、様々だった。看護師は、発達障害の学童がホールに居続けられるように、ホールに入る最初の一步を後押しし、ホールという場や人に慣れるまでは立ち入らず、ホールで受ける刺激が最小限になるように誘導し、他の子どもとの交流の機会を作り出していた。看護師のかかわりによって発達障害の学童はホールに身を置いて、集団生活をスタートすることができていた。

#### 2. あらわになったトラブルや危険行為に対応できるようにかかわる

入院後 1 ヶ月~3 ヶ月、発達障害の学童はホールで他の子どもと遊ぶようになるとトラブルになったり、遊びをエスカレートさせて危険行為をしたりするようになった。

看護師は、発達障害の学童が入院前にしていた暴言・暴力がようやく出現したことを確認し、子どもに適切な対応方法を伝え、思いを言葉にすることや看護師への相談を促していた。また、看護師は子ども同士の遊びが、遊びの範疇を超えた状態や危険性を伴う状態、周りにいる他の子どもにとって迷惑な状態に達したと判断した瞬間に、適切なかかわり方を伝え、危険行為を制止していた。この過程において看護師は、発達障害の学童の傍にいて問題を共に解決しながら子どもとの信頼関係を築き、子どもに振り回されない関係も築いていた。

看護師は発達障害の学童から「構って欲しい」言動や暴言・暴力を受けて揺さぶられた感情を多職種チームに言語化し、交代し合いながらホールに出ていた。看護師は、発達障害の学童の言

動について多職種間で話し合うことで意味を理解し、多職種の多様なまなざしを統合したかかわりを実践していた。看護師のかかわりによって発達障害の学童は入院前の行動パターンを修正し、大人との関係を修復することができていた。

### 3. 自分なりの方法で過ごせるようにかかわる

入院後3ヶ月以上経つと、看護師は発達障害の学童のホールで過ごす様子に変化していることを捉え、子どもがホールで自分なりの方法で過ごせるように、子どもが看護師に近づいてきても離れられるまで待ち、子ども同士の遊びには加わずにいた。看護師は発達障害の学童が退院に至るまでのかかわりを「育てなおし」と表現していた。

一連の看護師のかかわりによって、発達障害の学童は自由時間に複数の人々がいる空間で自分なりの過ごし方ができるようになっていた。

## 【考察】

### A. ホールという擬似社会

自由時間のホールという時空間とそこに存在する集団は、発達障害の学童にとって「不自由な時間」や刺激に溢れる空間であることの混乱といじめなどの傷つき体験を伴う過酷さがある一方で、学童期として成長する上では欠かせないものであった。発達障害の学童がこの過酷さを乗り越えて家庭や学校で再び生活できるように、看護師はホールという擬似社会において、発達障害の学童個々に焦点を当てた、子どもが退院に至るまでの長期的な「育てなおし」のかかわりと、その時々を形成している集団に焦点を当てた、集団のダイナミクスに応じたかかわりを行っていた。これら、2つのかかわりを以下で具体的に描く。

### B. ホールにおける「育てなおし」のかかわり

看護師はホールにおいて発達障害の学童にとっての安全感や安心感を保障し、基本的信頼感や自律性を育み、愛着の形成や修復を行い、周囲との交流を生み出して、子どもと大人との関係や同年代の子どもとの関係を修復していた。また、発達障害の学童が周囲との交流で生じる対立や葛藤を乗り越えられるように、看護師は子どもの行動パターンを修正し、対人関係スキルやコミュニケーションスキルを育てていた。これらの「育てなおし」のかかわりによって、発達障害の学童を学童期本来の発達段階に近づけ、学童期としての成長を育むことが重要であると示唆された。

### C. 集団のダイナミクスに応じたかかわり

特性や入院背景、入院時期が異なる複数の発達障害の学童がいるホールにおいて、看護師は子ども個々と複数存在する小集団のダイナミクス、ホールにいる集団全体のダイナミクスを見て、集団を維持・活性化していた。集団が流動的で、何が起こるかが予測困難な時空間であるからこそ、看護師が集団の交流の様相から危険性を予測しながら、発達障害の学童が成長する上で必要な傷つき体験も経験できるように見守り、瞬時に判断と対応を行う意味があった。

### D. 多職種チームでかかわる意味

看護師が発達障害の学童の暴言・暴力といった言動によって揺さぶられる感情への葛藤や、子どもの言動の意味を理解する困難さを乗り越えるためには、その感情を受け止め、子どもの言動に関する多様な視点や解決を共有し合える、多職種チームの支えが重要であると示唆された。

# 論文審査の結果の要旨

発達障害に関する診療技術が向上し、法的整備が進展する一方で、養育上の困難さといった問題があり、発達障害の学童が安心して暮らすことができる社会環境は十分に整っているとは言えない現状がある。本研究はこうした社会状況に即して発達障害の学童に着目し、家庭生活が困難となって入院した発達障害の学童への看護師のかかわりに焦点を当てており、現代的意義のある研究と言える。

先行研究の多くは、看護師が行う、発達障害の学童個人への認知行動療法に基づくかかわりや、看護師が抱く、かかわりの困難感に焦点が当てられており、発達障害の学童が苦手とする特定の時間や空間における看護師のかかわりは探求されてこなかった。本研究は、発達障害の学童が過ごす非構造化された自由時間や、複数の人々と過ごすホールという空間に着目した点、及び、治療目的や看護師が行うケアが明確になっていない、自由時間のホールで展開されるかかわりに着目した点にオリジナリティがある。

文献検討は、発達障害の学童の特性を詳細に言及し、全体が論理的に記述されている。結果では、継続的なフィールドワークで得た豊富なデータを多用し、情景が生き生きと描き出されている。発達障害の学童に密接にかかわる看護師の様子を丁寧に表現したことで、ホールに複雑に混在している、場面毎に意味が見出せるかかわりと数ヶ月間に渡って経時的に見ていくことで意味が見出せるかかわりの両方を浮き彫りにできたことが評価できる。

自由時間のホールという時空間やそこに存在する集団は発達障害の学童にとって、混乱や傷つき体験を伴う過酷さがある一方で、成長には欠かせないものである。この過酷さを成長につなげるために、ホールという擬似社会において看護師が発達障害の学童へ行っている、安全感や安心感の保障、周囲との交流の生み出し、対立・葛藤を乗り越えるためのスキルの育みといったかかわりに高い専門性があることが描き出された。また、看護師は発達障害の学童個々と同時に、ホールに複数存在する小集団のダイナミクスを見て、学童期に必要な子ども同士の交流やぶつかり合いを見守り、危険性を予測しながら対応するなど、ホールを形成している集団のダイナミクスに応じたかかわりをしていることが描き出されている。個々へのかかわりと集団へのかかわりの両側面を言及した点が本研究のユニークさであり、それらを具体的に示した点が評価できる。

本研究で得られた結果は、発達障害の学童が苦手とする自由時間や刺激に溢れた空間、集団の場における、周囲の支援のあり方を示唆するものである。また、本研究で明らかになったかかわりは、自由時間のホールという時空間を越えて、発達障害の学童を育むあり方や子ども一般を育むあり方を示唆するものである。これらは、発達障害の学童のケアに日々携わっている児童精神科領域の看護実践や、発達障害の学童と接する機会が増加している小児看護領域の看護実践に重要な示唆を与えると期待できる。

博士学位論文審査会では、本論文を学位規程第3条に定める博士（看護学）の学位論文として「合格」と判定した。その後、口頭での最終試験を行い、これについても「合格」と認めた。